ヒロシマの歌

今西　祐行

わたしはその時、水兵だったのです。

広島から３０キロばかりはなれた呉の山の中で、陸戦隊の訓練を受けていたのです。そしてアメリカの飛行機が原爆を落とした日の夜、７日の午前３時ごろ、広島の町へ行ったのです。

町の空は、まだ燃え続けるけむりで、ぼうっと赤くけむっていました。ちろちろと火の燃えている道を通り、広島駅の裏にある東練兵場へ行きました。

ああ、その時のおそろしかったこと。広い練兵場の全体が、黒々と、死人と、動けない人のうめき声で、うずまっていたのです。

やがて東の空がうす明るくなって、夜が明けました。わたしたちは、地獄の真ん中に立っていました。本当に、足のふみ場もないほど人がいたのです。暗いうちは見えませんでしたが、それがみなお化け。目も耳もないのっぺらぼう。ぼろぼろの兵隊服から、ぱんぱんにふくれた素足を出して死んでいる兵隊たち。べろりと皮をはがれて、首だけ起こして、きょとんとわたしたちをながめている軍馬。誰も話している者はありませんでした。ただ、うなっているか、わめいているばかりです。そして、まだまだ、町の方から、ぞろりぞろりと、同じような人たちが、練兵場に流れて来るのです。

練兵場の中ほどに、演習用に、長々とクリークがほってありました。そこには、赤くにごった水がたまっていました。

焼けただれた人々は、いつの間にかその水を求めてはい寄り、まるではげしい毒薬を飲んだように、水を口にすると、浅い水たまりに頭をつっこんで動かなくなっていくのです。

「水を飲ましちゃいかんぞ。やけどしているやつに水を飲ませると死ぬんだから。」

軍医がわたしたちに注意をしました。だが、わたしたちが注意してみても、もう注意など聞ける人々ではありません。わたしたちは止めませんでした。水を飲まなくても、間もなく死んでいくのですから。

わたしたちは、練兵場の真ん中に、死体をよけて、テントを張り、救護所を作りました。

軍医が、ごろごろころがっている人々の目を、１人１人、まるで魚をより分けるように調べていきます。わたしたちは、その中で生きている人だけをテントに運ぶのです。

テントは、すぐいっぱいになりました。木かげや、しまいには何もないぎらぎら太陽の照りつける草原にも、赤十字の小さな旗を立てて、生きている人をただ集めるだけでした。

１日目は、死体を運んでいるうちにくれました。夜になると、まだ燃え残っている火で町の空は赤く、その赤い空の色が、クリークの水に映って、まるで血の川の色をしていました。ずるりと焼けただれた人のはだににじんだリンパ液も、不気味に光ってうごめいているのです。

わたしたちは、練兵場の外ずれにある林の中にテントを張って、交代にねることになりました。

その夜、ふとわたしは赤んぼうの声を聞きました。初めはゆめを見ているのだと思ったのです。でも、少しねむると、また赤んぼうの声で目を覚ますのです。とうとう、わたしは起き出して、懐中電燈で、声のする方を探し始めました。でも、見当たりませんでした。

そのうちに、交代の時間がきました。わたしたちは、テントを出て、それから４時間、くずれ

た建物や土にうずまった広島駅の復旧作業に行きました。そして、夜明けにテントに帰ってきました。その時、わたしは、自分たちのテントのすぐ後ろで、立ちすくみました。ここだったのです。

1人の赤ちゃんが、女の人にだかれていました。初め、わたしは女の人はねむっているのだと思いました。赤ちゃんはお母さんの胸にうつぶせて、顔をくっつけていました。すると、その時、

「ミーちゃん、ミーちゃん。あんた、ミ子ちゃんよね。」

と、とつぜん女の人が声を出して、赤ちゃんの顔や頭をなでるのです。よく見ると、お母さんは、目が見えないらしいのです。

このお母さんは、ミーちゃんと呼ぶこの赤ちゃんと、はなれた所にいる時に、あのおそろしいことが起こったにちがいありません。目がよく見えないままに、おしつぶされた家の中から、それとも、だれか他の人に助け出されていたミーちゃんを探し出して、やっとここまで逃げてきたのでしょう。だが、よく赤ちゃんの顔が見えなくて、心配で、おそろしいのです。

「ミーちゃん、ミーちゃん。」

と、呼ぶのをやめたかと思うと、お母さんは、こんこんとねむりこんでしまいました。と、赤んぼうが泣き始めました。と、また、お母さんが呼ぶ。お母さんは、だんだん気が遠くなっていくようでした。背中から後頭部にかけて、ずるりと皮が落ちているのでした。

「しっかりするんだ、お母さん、しっかりしなきゃ……」

わたしは思わず、そんなことをさけびました。でも、お母さんは、わたしに答える様子はありません。しばらくすると、また、

「ミーちゃん、ミーちゃんよねえ。」

と、くり返すばかりです。わたしは、このままにして、立ち去れなくなりました。といって、どうすればいいのか、さっぱり分かりません。「しっかり、しっかり……」ただそんなことばかり、心の中でさけんでいました。

軍医のいる所へ連れて行ったらいいものかどうか、そんなことに迷いながら、いったんテントに帰りました。すると、それまでより大きな赤ちゃんの泣き声がしました。しかも、いつまでたっても、泣き続けるのです。

行って見ると、お母さんは、もう死んでいました。赤ちゃんのくわえていたおっぱいが、固くなってしまったのです。お母さんは、赤ちゃんをしっかりだいたまま、動きませんでした。

わたしは、赤ちゃんをだき取りました。その時の、固くだきしめた冷たいお母さんの手の力、わたしは今もまざまざと思い出すことができます。わたしは何度も、お母さんから赤ちゃんをうばい取るような気がして、気がとがめ、考えこみました。その手は、生きているとしか思えませんでした。

「だいじょうぶですよ。お母さん、わたしが預かります。」

わたしは兵隊でしたし、預かりきれるわけがありません。それでも、そうお母さんに言わないと、赤ちゃんをもぎとることができませんでした。

わたしは赤ちゃんをだいて、駅の方へ走りました。とちゅうで、名前のことを思い出しました。引き返して、お母さんの胸から、ぬい付けてあった布の名前をちぎり取りました。

しかし、どこへ行っても、赤ちゃんをわたせそうな人など歩いていません。みんな、傷ついた自分の体をどうすればいいのか迷っているのです。とても人のことなど頭にうかばないし、見えないといった様子です。

駅の近くまで行った時、やっとリヤカーに荷物を積んでにげて行く２人の人に会いました。
「もしもし、この赤ちゃんを乗せて行ってくれませんか。母親が死んでるんです。けがはなさそうですがね。この子には・・・・・・」
わたしはそう言って、ポケットに昨夜の夜食のかんぱんがあるのを思い出して、いっしょに出しました。
しばらく、２人ははっとしたように顔を見合わせていましたが、
「ええでしょう、車に乗せてつかえ。駅に救護所あるでしょうから。ごちそうさんです。」
「ねがいます。」
わたしはそう言うと、せっかく取りに帰った名ふだをわたすのも忘れて、大急ぎで帰りました。とちゅうで名ふだのことをまた思い出しましたが、もう追いかけるひまはありませんでした。
わたしは大急ぎでテントに帰ったのですが、もう食事が始まっていました。わたしは、どこへ行っていたのかときかれて、兵長にしかられ、ひどくぶたれました。なぜか、わたしは赤ちゃんのことを話しませんでした。いくら説明しても、それは、兵隊のわたしが、かってな行動をとっただけのことなのですから。戦争ということが、こんな悲しいものであることを、その時初めて知りました。

それから長い年月がたちました。
戦争が終わって、７年目のある日、わたしはラジオから聞こえてくる言葉に、はっとしました。それはたずね人の時間でした。
「・・・・・・さんが、広島の練兵場で、一つか二つの赤んぼうを、リヤカーを引いて行く家族の人に預けた海軍の兵士のかたを探しておられます。」
と言うのです。まさかと思いました。それに、初めのほうを聞きもらしているので、たずねている人の住所も分かりません。
でもわたしは、もうすっかり忘れていたあの日のことを、急にまざまざと思い出しました。ミ子ちゃんと呼ばれていた赤んぼうのお母さんの死に顔は、はっきりと目にうかびました。初め、なんだかあのお母さんが、探しているようなさっかくを起こしました。だが、そんなことがあるはずがありません。もしかすると、あのリヤカーを引いて行った人だろうか。でもわたしは、あの時ミ子ちゃんをたのんだ人の顔は、どうしても思い出せませんでした。
それから３日間、ラジオのたずね人の時間を熱心に聞きました。くり返し放送するかもしれないと思ったからです。しかし、二度と聞くことができませんでした。
わたしはふと、あの時、お母さんの胸からもぎ取った名ふだを、あのころの手帳といっしょにだいじに持ち続けていたことを思い出しました。長い時間かかって、それを探し出すと、わたしは放送局へ行って、たずねてきている人の住所を教えてもらいました。たずねている人の名前は女の名で、住所は島根県になっていました。
あるいは、全くわたしには関係のないことかもしれないとも思いましたが、とにかく、あの時の様子を書いて、もしやわたしのことではないでしょうかと手紙を出しました。すると、すぐに返事が来ました。それには意外なことが書いてありました。

こんなに早く、あなた様からご返事をいただけるとはゆめにも考えていませんでした。はたして、あの時の兵隊さんが生きていらっしゃるかどうか、また、たとえお元気であっても、あの時

のことなど、覚えていて、返事を下さるかどうか、それほどあてにもしていなかったぐらいです。でも、どうしても、あの時の、赤んぼうをだいてかけていらっしゃった兵隊さんのことを思うと、だまっていられなくて、放送局にお願いしたのでした。

あの時、わたしたちは、それほど気にもしないで、まるで荷物のように赤ちゃんを預かりましたが、駅に行っても、どこへ行っても、赤んぼうは引き取ってもらえませんでした。わたしたちは、親類をたよって、甘日市まで行くところでした。その甘日市へ行っても、だれも相手にしてくれる人はありませんでした。

そのうちに、『この子はきっと、ヒロ子の生まれかわりよね。』そんなことを考えるようになりました。と申しますのは、あの時、わたしたちは目の前で自分たちの赤んぼうをなくしたところだったのです。それで、名前も同じヒロ子にして、今まで育ててきました。

ところが、今年の２月、主人がとつぜん、血をはいて死んだのです。主人は広（地名）の工廠に勤めていまして、あのピカドンの光にはぜんぜんあたっていないのです。工場から帰ってくると、家も何もかもなかったのです。それなのに、７年もたっているというのに、原爆症で白血病だったのです。

主人に急に死なれて、わたしたちはくらせなくなったのです。今、主人の里の、広島と島根の県境のこの村に来ているのですが、どうしてこの子を育てていったものか迷ったあげく、あの日のことを思い出し、もしや、この子の本当の身内のかたが見つからないものかと、たずね人に出したわけでございます……。

「ありがとうございました。ありがとうございました。ミ子ちゃんは元気で、助かったのですね。」

わたしは思わず独り言を言って、１人で手紙に頭を下げました。

それにしても、遠くにはなれているわたしは、どうしていいのかわかりませんでした。わたしはすぐにもとんでいって、ミ子ちゃんに会ってみたいと思いました。でも、わたしも勤め人です。そう、かってに休むわけにもいきません。

わたしはすぐ返事を書きました。夏まで待ってください。夏になったら、きっと休みをもらって、広島へ行きます。広島でお会いして、いろいろわたしにできることなら相談いたしましょう。そういう返事を出しました。

その年の夏、ちょうどあの日のように朝からぎらぎらと暑い日、広島の駅で、わたしたちは会いました。赤いズックぐつに、セーラー型のワンピースを着ている１年生というのが、目印でした。わたしは、白いワイシャツにハンチング、こん色のズボンというのが目印の約束でした。すぐに分かりました。

「橋本さんですね。」

「はい。あの……」

「ぼく、稲毛です……」

ふしぎな気持ちでした。あと何を話しだしていいのか分かりませんでした。広島の町はすっかり変わっていました。ミ子ちゃんは、はずかしそうに、何を言ってもだまって、お母さんのそでにかくれていました。

「ああ、この子は何も知らないのだな。幸せだな。」

わたしは最初にそう思いました。

その日、初めて、わたしはあの日死んでいったミ子ちゃんのお母さんの話をしました。とちゅ

うまでいっしょうけんめいに聞いていたお母さんは、急にぼろぼろとなみだを流しだして、
「ええ、もう、今日お会いするまでに、決心したのです。ヒロ子はやっぱりわたしの子です。だれがなんと言ったって、あげるものですか。」
ミ子ちゃんをだれかに預けたいという相談をするために来たはずのお母さんは、そう言って、泣きじゃくるのです。
「そのお母さんは、ほんとうにえらいお母さんですわ。わたしははずかしい。目の前で、死なせてしまったのですものね。そのかたに代って、わたしは、今度こそ、本当に、ヒロ子のお母さんになります。遠い所から来ていただいて、すみませんでした。でも、こうしてお話しをうかがえたので、決心できたのです。」
わたしは、ミ子ちゃん、いいえ、ヒロ子ちゃんです。ヒロ子ちゃんのいない所で話し合いました。ヒロ子ちゃんは、本当のお母さんだと思っているのですから。
ヒロ子ちゃんとお母さんは、その日の夕方の汽車で、また島根の方へ帰りました。わたしたちは、ヒロ子ちゃんが中学校を卒業した時に、また会う約束をしました。その時まで、何も、ヒロ子ちゃんには打ち明けないことにしました。
わたしは、ちょっとさびしい気がしました。半日しか会えなかったからむりもありませんが、ヒロ子ちゃんと、何もお話しができなかったからです。２人が汽車に乗ってから、プラットホームに売っていた、パイナップルの氷菓子を１袋買って、ヒロ子ちゃんにわたしました。その時、
「おーきに。」
と、言ったきりでした。
その時の、何かヒロ子ちゃんの暗いかげが、いつまでもわたしは気になりました。すると、追っかけるように手紙が来て、これはまた悲しいことが書いてありました。
今いる島根の家は、死んだ主人の家で、主人の母、ヒロ子ちゃんの義理のおばあさんにあたる人が、ヒロ子のことが気に入らないのだというのです。死んだ本当の孫のことを思うにつけても、老人の意地の悪さで、何かとヒロ子ちゃんにあたるのだというのです。そして、とうとうある日、
「おまえは拾われた子のくせに……」というようなことを、ヒロ子ちゃんに言っておこったのだそうです。
「やはり、本当のことを、もう言ったほうがいいのでしょうか……」
お母さんの手紙には、こう書いてありました。
それはわたしにも分からないことでした。広島で初めて会った時の感じでは、はっきりしなくても、何かヒロ子ちゃんも感じていることがあるようにも思われました。ヒロ子ちゃんをよそにやりたいというお母さんの弱気が、ヒロ子ちゃんにも敏感に感じとられていたのにちがいありません。わたしは、できれば、いなかの家を出て、ヒロ子ちゃんと２人でくらすことができないものだろうかと思い、そのことを書き送りました。
すると、その年のくれ、ヒロ子ちゃんの親子は、広島に出て、小さな洋裁学校に住みこみで働けるようになったという手紙が来ました。わたしはほっとしました。それからも２度３度手紙が来ましたが、その手紙もだんだん短くなって、しまいには来なくなりました。わたしもいつかヒロ子ちゃんのことを、忘れていくようでした。
ところが、今年の春、何年ぶりかで手紙が来ました。ヒロ子ちゃんが中学を卒業したのでした。
そして、ぜひ一度会ってヒロ子のお母さんの話などしてやってほしいとありました。
そうして、今年の夏、わたしはまた広島を訪ねることになったのです。わたしは原爆の記念日

を選びました。ヒロ子ちゃんはもう１５でした。中学を卒業して、お母さんが小使いさんをしているその洋裁学校で、洋裁の勉強をしているのでした。もうすっかりむすめさんのように大きくなっていました。

わたしは記念日を選んだことを、後悔していました。記念のいろいろな行事は、何かわたしたちの思い出とかけはなれたものにしか思えなかったからです。

その日、わたしはいよいよヒロ子ちゃんに、死んだお母さんのことを話す約束をして、２人で１日、町を歩き回ったのです。でも、どこにも、そして、いつまでたっても、そのきっかけができないままに、つかれてしまいました。

夕方、わたしたちは一けんの食堂に入りました。その食堂の裏は、川に面していました。暑いので、わたしたちはその川の見える窓の近くに席をとりました。

「ヒロ子ちゃん、もう洋服ぬえるのかい？」

「いいえ、今、ワイシャツやっているんです。」

そんな話を始めながら、ふとわたしは窓の外を見ました。なんだか、赤いものが、川の上から流れてくるのです。

「あっ、あれ。」

と、言うと、

「とうろう流しです。去年もやっていました。きれいですよ。」

ヒロ子ちゃんが教えてくれました。去年、わたしも、広島のとうろう流しにことを新聞で読んで知っていました。原爆犠牲者の戒名を書いたとうろうを、川に流しているのです。

わたしは、そうだ、今話さなければならないのだと思いました。

わたしはやっと、ポケットに持っていた布の名ふだを取り出して、

「ヒロ子ちゃん、これ何だか知ってる？」

と、ききました。

広島市横川町２－３
長谷川清子　　Ａ型

と書いた、うすよごれた小さな名ふだです。

「何ですか、それ。」

ふしぎそうに、ちょっと指先でさわってみたりしました。わたしは、じっと窓の外のとうろうを見ながら、あの日のヒロ子ちゃんのお母さんの話をしました。ヒロ子ちゃんは、だまって聞いている様子でした。ヒロ子ちゃんが、わっと泣きだしたりしたらどうしようと、わたしは心配でした。でも、ふと、ヒロ子ちゃんの顔を見て、わたしはほっとしました。ヒロ子ちゃんは、その名ふだを胸のところにおさえ、わたしの方を見ると、にっこり笑って、

「あたし、お母さんに似てますか？」

と、言うのです。

うれしいのやら、かわいそうなのやら、わたしのほうがすっかりなみだぐんでしまいました。

ヒロ子ちゃんは強い子でした。どんなことにも負けていませんでした。

お母さんが心配するといけないからと言って、わたしたちは、それからすぐ洋裁学校に帰りました。食堂を出て、橋をわたろうとすると、とうろうを見る人たちでいっぱいでした。そこを通

り過ぎて、ちょっと暗い所になりました。
「会ってみたいな……」
　ポツンとヒロ子ちゃんが独り言のように言いました。勝ち気なヒロ子ちゃんは、その時、こっそり泣いていたのかもしれません。
　その日は、わたしも洋裁学校の一部屋にとめてもらいました。わたしが起きると、ヒロ子ちゃんのお母さんが出て来て、
「ゆうべ、あの子はねないんですよ。」
と、言うのです。
「やっぱり」
と、わたしが心配そうに言うと、
「いいえねえ、あなたにワイシャツ作ってたんですよ。見てやってください。」
　そう言って、うれしそうに、紙に包んだワイシャツを、こっそり見せるのです。
「ないしょですよ。見せたなんて言ったら、しかられますからね。」
　そっとひろげてみると、そのワイシャツのうでに、小さな、きのこのような原子雲のかさと、その下に、Ｓ・Ｉと、わたしのイニシャルが水色の糸でししゅうしてあるのです。
「よかったですね。」
「ええ、おかげさまで、もう何もかも安心ですもの……」
　お母さんはそう言って、笑いながらも、そっと目をおさえるのでした。
　わたしはその日の夜、広島駅で、汽車が出る時に、窓からそれを受け取りました。わたしはそれを胸にかかえながら、いつまでも１５年の年月の流れを考え続けていました。
　汽車はするどい汽笛を鳴らして、登りにかかっていました。

１９８９年修学旅行・広島市平和公園見学事前授業の記録（瀬戸中学校２年Ａ組）

主　　題　「平和への願い・修学旅行に寄せて」　　１９８９年１０月４日（水）
資　　料　「ヒロシマの歌」（今西祐行）　　授業者　森口健司

Ｔ１：「私はそのとき水兵だった」という言葉で始まっています。資料の前半部分にでてくる、原爆が投下された時の異常な惨状、その中で一人の水兵（主人公）が取った行動から、みんなが感じ取ったものを発表してください。資料の中にでてくる広島の惨状は、これが今、私たちが暮らしている日本の姿なのかという気持ちになってきます。２週間後瀬戸中学校修学旅行団として、みんなで広島の地を訪れますけど、そんな異常な状況の中で取られた主人公の行動について、また主人公の戦争にかかわっての生きざま、生き方について発表してください。

潮崎(女)ぶたれることをわかっていながら、それでもなお一つの小さな生命を救うため、赤ちゃんを渡せそうな人を探した主人公の姿が深く心に残りました。人の生命を助けたのに、それが勝手な行動になってしまう戦争というものが、いかに間違った世の中にしていたかがわかりました。

Ｔ２：赤ちゃんを助けた行動が、当時の戦争という異常な状況の中では、勝手な行動として、上官からわけがわからなくなるぐらいたたかれる。生命を助ける行為が、規律を乱すとしてたたかれる行為となってしまうんですね。

元木(女)一番心に残ったのは、主人公が、死んだお母さんから「だいじょうぶですよ。お母さん、私が預かります」そう言って、赤ちゃんを抱きとったところです。死んだお母さんに心から語りかける姿に、主人公の心の優しさを感じました。

T 3：優しさに溢れる行為ですね。

大塚(男)子どもを助けてきたことを兵長にも言わなかった主人公は、その子どもが無事、育ってくれればという願いでいっぱいだったと思います。その願いが主人公に強い勇気を与えていたと思います。

T 4：今、助けてきた赤ちゃんを預けてきた。その赤ちゃんが無事育ってくれさえすれば、助けたことが勝手な行動であると殴られても、今、自分がしてきたことは決して恥ずかしいことではない。幸せになってほしいという気持ちが、主人公に強い勇気を与えていったということですね。

立秋(男)自分が兵長から殴られることになっても、赤ん坊を助けた主人公はとても立派な人だと思いました。

森(女)一つの生命を必死になって助けようとした主人公の中には、一人でも多くの原爆で傷ついた人を助けなければという気持ちがそのまま行動に出たのだと思いました。

T 5：一人でも多くの人を助けなければという気持ちが、底にあった。それが、この資料にえがかれた行動を引き起こしていったということですね。

楠(女)草原で女の人に抱かれている赤ちゃんのための身に余る思いやりに、私はものすごく心を打たれました。人間の生命の重さを知り、本当の優しさを主人公は持っていたんだなあと思いました。

T 6：優しさ……。その奥にあるものは、生命の重さをしっかり知っているということですね。テレビを見ていると、新聞を見ていると、どこかで誰かが殺されたというニュースや記事を目にします。生命とはとてつもなく大切なものであり重いものである。何万何千という人が殺されていく異常な状況の中にあっても、そのことをしっかりと知っていたんですね。

枝川(男)主人公は人が困っているのを見ると、放っておくことができない人だと思います。自分の持っている力を人のために出せる人だと思います。

戸島(女)戦争という異常な状況の中で、ほとんどの人が自分のことしか考えられない時に、一つの幼い生命を助けた姿に感動しました。

T 7：自分が生きる自分が生き残ることしか考えられない時に、すばらしい行動があったということに感動が起こってきますね。主人公から預けられた赤ちゃんに死んでいった子どもの「ヒロ子」と名づけ育てていった。そのお母さんの姿について、みんなが思うことを発表してください。

横瀬(男)家を出てまでヒロ子ちゃんを必死に育て続けたお母さんは、本当によく頑張ったと思いました。

T 8：私も、この場面にグッときたんです。どこか施設に預けてしまうのが普通かもしれないと思うんです。自分に百の宝があったら、十の宝を分けてやることは、たいていの人にできると思うんです。自分の余裕があったら、いろんなことをしてやることができるんです。しかし、お父さんが原爆症でなくなり、自分の暮らしに全く余裕がなくなった。分けてやるものがなくなっていった。その中で自分の暮らしを守るために、この子は自分の本当の子でないから、施設に預けていく、悲しい現実だけど、それが普通だと思うんです。しかし、お母さんはそうで

はなかったですね。

増田(男)ぼくも、普通の人ならヒロ子ちゃんを施設に送っていたかもしれないと思います。しかも、ヒロ子ちゃんのことを思って、家を出てお母さん一人でヒロ子ちゃんを育てていった姿は立派だと思いました。

T 9：この姿も、まさしく立派な姿ですね。立派なという意味は深いですね。

津田(男)預かった子どもを主人が亡くなった後も必死に自分の子どもとして育てることは、なかなかできるものではないと思いました。

尾崎(女)さまざまな苦しみを乗り越え、ヒロ子ちゃんを自分の子どもの生まれ変わりとして育てたことは、ヒロ子ちゃんにとっても、お母さんにとってもよかったと思いました。

T10：苦しかったけど、両方の幸せにつながっていったような気がするんです。本当に苦しかった、大変だった。その苦しさ、大変さに負けたら、このお母さんの今の幸せはなかったと思います。苦しいけど頑張った。子どもというものはそんなものなんですよ。みんなもそんな存在なんですよ。みんなを育てることは大変なことなんです。でも、みんなの存在は、みんなの頑張りは、みんなの家族に力を与えていく。頑張ることによって苦しいことが苦しくなくなる。喜びに変わっていく。そんなことを感じるんです。

楠井(男)本当は自分の子どもでないヒロ子ちゃんを自分の子どものように育ててきたお母さんは、偉いなあと思いました。また、主人公からヒロ子ちゃんの本当のお母さんのことを聞いて、よりいっそうヒロ子ちゃんを大切に育てていくところはとても立派でした。

久住(女)死んでいったヒロ子ちゃんのお母さんの話を聞いて、自分も死んでいったお母さんに負けないように、ヒロ子ちゃんを幸せにしていこうと思ったところが心に残りました。

坂本(女)主人公に「ヒロ子はやっぱり私の子です」と言ったお母さんは、どんなお母さんにも負けないほど愛情いっぱいだったと思いました。

田代(女)もし、私が、ヒロ子ちゃんの友だちだったら、「今のお母さんが本当のヒロ子ちゃんのお母さんだよ」と言いたいくらいでした。本当にすばらしいお母さんだと思いました。

高橋(女)何も知らないヒロ子ちゃんが、おばあさんにつらく当たられたとき、必死にお母さんがヒロ子ちゃんを守ろうとした場面にとても感動しました。このお母さんはすごいと思いました。自分の心はどんなに傷つこうとも、何も知らないヒロ子ちゃんの心には決して傷をつけたくないという思いに溢れていたと思います。

T11：本当の母親の姿でしょうね。みんなもやがて「お母さん」と言われる立場になる時がきたとき、親のすごさをしみじみと感じますよ。みんなそれぞれの生きる状況があり、それぞれの苦しみを抱えて生きています。でも、どんな状況にあっても、親が子どもに寄せるものはすごいものです。主人公に生命を助けられ、主人公に預けられたお父さん、お母さんに、さまざまな苦労の中を育てられてきたヒロ子ちゃんについて考えてみましょう。自分を手に抱いて死んでいったお母さんのことを主人公から聞かされた日、寝ないで主人公のために、ワイシャツをつくったヒロ子ちゃんの心の中には、どんな思いがあったと思いますか。みなさんが感じ取ったものを発表してください。

上村(男)死んでいくはずだった自分を助けて、お母さんに預けてくれたこと、本当ならこの世にいない自分を今ここにいさせてくれることに感謝して、そんな感謝の気持ちをいっぱいにして、寝ることも忘れて主人公のために、ワイシャツをつくったと思います。

松岡(男)寝ないでワイシャツをつくったヒロ子ちゃんの心の中は、自分を助けてくれたことへの

感謝の気持ちと、その主人公が自分の本当のお父さんみたいに思ったからだと思います。

中野(女)私を助けてくれた生命の恩人という気持ちと、私のお父さんという気持ちを込めてワイシャツをつくったのだと思いました。

八木(女)死んだお母さん、助けてもらった主人公、今まで育ててもらったお母さんに対して、感謝の気持ち。また、これからの人生も、悲しみを乗り越えて一生懸命生きようとする思いがあったのだと思いました。

T12：これからの私の人生を一生懸命生きていきますという決意があった。

浜川(女)当時、まだ赤ちゃんだった自分の小さな生命を大切に思ってくれた主人公に、感謝の気持ちを心から表現したくて、平和を願って、一生懸命に寝ないでワイシャツを作り上げたのだと思いました。

T13：感謝の気持ちと平和になってほしいという思いですね。

中本(女)自分は、自分のお母さん、主人公、育てのお母さんなどの大きな思いやり、深い愛情を受けて、大切に育てられた。そんな心を込め、「これからも強く生きます。立派に幸せをつかみます」という思いでワイシャツをつくったのだと思いました。

久住(女)私も、自分の生命の恩人である主人公に感謝の気持ちと、これからも今までのように「今のお母さんといっしょに頑張っていきます」という言葉をワイシャツに込めてつくったのだと思いました。

T14：お母さんと共に頑張っていきますという気持ちですね。そして、このワイシャツにきのこ雲の刺繍をした。きのこ雲とは何ですか。

上村(男)原爆が落ちた後にできる雲です。

T15：原爆が落ちた後にできる原子爆弾の恐怖の象徴のようなものですね。修学旅行で広島を訪れるとき、みんなで「原爆の子の像」の前でセレモニーを行います。あの「原爆の子の像」ができるきっかけとなった佐々木禎子さんの死、彼女もきのこ雲ができることによって降る黒い雨にあたったがために、原爆症によって生命を奪われています。佐々木禎子さんだけでなく、黒い雨は多くの生命を奪っています。そんなきのこ雲ですね。そのきのこ雲をヒロ子ちゃんは、どのような色で刺繍していますか。

津田(男)水色です。

T16：水色ですね。水色のきのこ雲の刺繍には、どんな意味が、どんな願いが、どんな思いが、込められているか。１９４５年８月６日の深夜、死んでいった母親のもとから救い出してくれた生命の恩人に送ったワイシャツに水色のきのこ雲の刺繍をする。その刺繍にはどんな意味があるのだろうか。みんなが感じ取ったものを発表してください。

五島(男)早く平和な日がきてほしいという願いと、青く透き通った空が、いつまでも続くことを願ったのだと思います。

T17：水色のきのこ雲、それは青く透き通った空へのあこがれということですね。

錦織(女)ワイシャツに水色の糸でししゅうしたのは、もうこのようなことがないようにと、今ある平和な空が続くようにと、思いを込めて刺繍をしたのだと思いました。

T18：平和への願いということですね。

斎藤(女)水色の糸で刺繍したのは、自分の気持ちが水色のような清々しい気持ちだったからだと思います。本当のお母さんのことを聞かされたショックのあったと思うけど、死んでいったお母さんの分も、頑張ろうという新たなスタートを切るんだという気持ちになったのだと思いま

す。

T19：うすうす感じていただろうけど、非常にショックだったでしょう。どうして家を二人で出なければならないか。どうしておばあさんたちにつらくあたられるのか。さまざまな不安や悲しみがあった。そして、今、本当のことを知り、お母さんと二人で立派に澄みきったさわやかな気持ちを大切に頑張っていくんだという決意が、水色のきのこ雲に込められたということですね。

元木(女)原爆が落とされたとき、空は真っ暗でした。でも青空はとても美しいです。だから、その美しい青空できのこ雲をかくし、原爆をなくしたい。そんな思いできのこ雲のような傘を刺繍したのだと思いました。

中本(女)自分自身にとっても、つらく、悲しいきのこ雲ですが、大きな未来、素敵な幸せを自分のために開いてくれた主人公やお母さんの思いやり、願いに答えて、自分の心を示すため、平和、青空、幸せの色である水色を選び、きのこ雲を刺繍したのだと思いました。

T20：この授業はまさしく生命の学習ですね。奪われてきた多くの生命がよみがえってくる。生命の授業ですよ。どんなに苦しかったか、どんなに悲しかったか、どんなにつらかったか。その思いを、その悲しみ痛みを、しっかり受け止めていかなければならないと思うんです。平和、青空、幸せの色、それがまさしく水色の意味だということですね。

上村(男)本当のお母さんを亡くした悲しさ、その原因となった原爆。それをもう二度と繰り返さないという思い、そして、今広がっている大きな黒いきのこ雲がなくなり、これからは一面に広がる青い空になってほしいという、未来に期待を寄せて水色の糸でししゅうをしたのだと思いました。

T21：本当の平和、本当の幸せを願って生きていく。お母さんと共に生きるという気持ちから刺繍されたということですね。２週間後の１０月１９日よりみんなは修学旅行へ出発し、第１日目に広島の地をみんなで訪れます。２週間後にひかえた修学旅行で、みんなは広島の大地を平和公園の土を踏み締めることになります。そして、みんなで「原爆の子の像」の前で、「原爆許すまじ」「エーデルワイス」をリコーダーで演奏し、「原爆許すまじ」を合唱します。修学旅行で広島市平和公園を訪れるみんながこの「ヒロシマの歌」を学習した意味、２週間後に広島を訪れる私たちにこの資料が問いかけているものは何か。みんなが学び取ったものを発表してください。

宮川(男)人の生命の尊さだと思います。どんな小さな生命でも、今まさに消えかけようとしている生命でも、同じ人間の生命です。その生命の意味を問いかけていると思います。また、修学旅行に行って、原爆資料館に入ったとき、どんな気持ちで展示されているものを見るか、その意義を教えられたと思います。

T22：原爆資料館をみんなで見学します。みんなは資料館の中でどのように一つ一つの展示物を見つめ、その意味をどのように受け止めていくことができるか。そのことが今、問われていると思うんです。

横瀬(男)戦争というものがどんなものなのかを戦争を知らないぼくたちに訴えているんだと思います。ぼくは「ヒロシマの歌」を勉強して、戦争がどんなに恐ろしいものであるかを思い知らされたように思います。戦争が終わって後に残るものは、死んだ人、けがをした人、病気の人、そんな止まることのない悲しみだと思います。

坂本(女)「ヒロシマの歌」は、私たちが修学旅行で広島をたずねたとき、何を感じ取り、何を学

ばなければならないかを訴えているように思いました。私たちが修学旅行で学ばなければならないことは、戦争の惨さだけでなく、死んでいった人たちの願いだと思いました。

近藤(女)私たちが修学旅行で広島へ行くということは、単にみんなで旅行するということではなく、人間の生き方やあり方を勉強するために行くのだということを「ヒロシマの歌」は私たちに訴えているように思いました。また、この前、母と原爆について話をしていたら、母が、「長崎にも原爆が落とされたのに、どうして広島より印象が薄いんだろうか」と言いました。確かに私も、そう思いました。「被害にあったのは同じなのになぜだろう」という疑問をみんなで広島を訪れた時に、しっかりとつかんできたいと思います。

T23：「たたかいのヒロシマ、祈りのナガサキ」と言われます。ヒロシマの取り組み、ナガサキの取り組み、その奥に流れるものを広島の地でしっかりと感じ取ってください。

正本(女)原爆によって死んでいった人をこの「ヒロシマの歌」を勉強するまでは、かわいそうにとしか思っていませんでした。「ヒロシマの歌」を勉強して、原爆で多くの生命が奪われたことをかわいそうと思うのではなくて、私たちはその事実をしっかりと胸に焼き付けて、平和への第一歩を踏み出さなければいけないと思いました。

T24：ただ単にかわいそうととらえるのではなくて、何が私たちに問われているかを学ばなければならないということですね。

中本(女)「ヒロシマの歌」の中には、原爆の街ヒロシマの本当の人々の姿、また、幸せをつかんで平和を取り戻そうとしている現在の人々の姿、そして、原爆投下によって、つくられた人々の悲しみ、苦しみ。その中にあっても必死に生きる人々の思いや願いに溢れていました。「ヒロシマの歌」は、決して奪いさることのできない人間の優しさ、どのような状況にあっても強く生き続ける人間への愛というものを、私たちに強く訴えていると思いました。

T25：人間の優しさ、人間への愛ですね。

元木(女)戦争の残酷さ、平和への願い、そして、人への愛情、優しさだと思います。また、戦争の残酷さ、怖さがわかるからこそ、平和のありがたさがわかるのだと思います。本当の平和とは何かということを問いかけているように思います。

二川(女)私は父の仕事について広島まで行ったことがあります。そのとき自衛隊に勤める人の引っ越しの仕事でした。引っ越しの時私はびっくりしました。近くに住んでいる人が、みんな威勢よく引っ越しを手伝ってくれるんです。そのとき、広島の人たちは原爆の悲劇を乗り越えて、今も精一杯に、また、幸せに生きているんだなあと思いました。「ヒロシマの歌」を勉強して、引っ越しを手伝ってくれた人たちのことを思い出しました。

三輪(男)ぼくも一度、広島に行ったことがあります。平和公園にも行き、原爆資料館へも入りました。ただその時は、小学校の５年生だったこともありますが、「かわいそう」としか思いませんでした。ぼくたちは、もっともっと原爆の悲しみ、苦しみ、痛みを知らなければならない、そのことを「ヒロシマの歌」が、ぼく自身に教えてくれたような気がしました。

T26：小学校５年の時に感じたもの、中学２年になり、さまざまな学習をして、さまざまな取り組みをして、訪れる広島、その広島から感じるもの、その違いをしっかりととらえていきましょう。

森(女)人間としての心の強さ、それと何よりも心の温かさだと思います。一人の子どもを必死に育てていく人、そして、その子どもの幸せを祈りながら見守る人。一人の人間が育っていくためには、多くの人々の温かい心がなければ、人というものは立派には育たないんだと思いまし

た。

T27：私たちは多くの人の優しさに支えられて生きていますね。そのことを誠実にしっかりととらえることができる。その気持ち、その思いを大切にしていく、そして、そのことをしっかりと胸に刻み、そのことを学んでいく。それが２週間後にひかえた修学旅行の意味だと思います。

西野(女)「ヒロシマの歌」の中で、私は主人公の行動に感動しました。一つの生命を助けるために、自分のわずかな食料を渡して、必死に頼む、そんな行動に人間の真の優しさを感じました。人間は優しさに励まされ、支えられて立派に成長していくんだということを訴えていると思いました。

浜川(女)原爆がどんなものであるかを心の底から知っているのは、世界中で日本だけです。その意味において私たちは、原爆の怖さを世界中に訴えていかなければならないと思います。２週間後の修学旅行で、その事実をしっかり瞳に収め、じっくり考え、今まで以上にあの恐ろしい瞬間を私たちの心に刻んで、平和の尊さをじっくり学ばなければならないと思いました。

錦織(女)「ヒロシマの歌」の授業から、人間の生き方についてもっともっと勉強したいと思うようになりました。また、修学旅行でもっとたくさんのことを学び取ってこようと思いました。広島をたずねたとき、ヒロ子ちゃんが描いた水色のきのこ雲のししゅうの意味を心の底から理解したいと思います。「ヒロシマの歌」は広島を訪れる修学旅行の意味を私たちに問いかけているように思います。

米田(女)人間の尊さ、生命の尊さをみんなにわかってほしい、そして、世界中を立派にしてほしいと「ヒロシマの歌」の作者は、願っていると思いました。また、「ヒロシマの歌」は、人間の本当の幸せと人間の生命の尊さを理解してほしいという多くの人々の願いから一つの作品になったのだと思いました。

T28：先日の瀬戸中祭表現の部で、みんなが見事に演じてくれた「エーデルワイス」の演奏、「原爆許すまじ」の演奏、その演奏に寄せて語ってくれた中本さんのナレーション。それは夏休み、８月６日（原爆の日）に書いた生活ノートのなんです。そのナレーションをもう一回みんなに聞いてもらおうと思います。

中本(女)『人間は　父や母のように　かんたんに　なくしてしまって　よいのだろうか』

この詩は、広島、長崎に落とされた原爆に寄せる人々の思いを記したものの一つです。１９４５年８月６日午前８時１５分、広島の人々も一生懸命生きていたというのに、あまりにも簡単に幸せを壊された。そして、時間（とき）は誰しもの胸の中で流れることをやめたのです。その悲劇の日から４４年がたち、今年も、広島平和記念式典が行われました。私も、８時１５分には黙祷を捧げました。私が黙祷を捧げている間中、原爆が投下される一瞬前まで、戦乱の世の中でありながらも、ささやかな幸せがあった情景と、あの原爆が炸裂した瞬間のきのこ雲が上がるシーンとが瞼の裏を繰り返し繰り返し巡っていました。私たちは、４４年目の秋、修学旅行団として、２年生全員で広島の地を訪れます。私たち一人一人がそれぞれの思いを胸に、広島の今なお消えない、消すことのできない重い傷跡を見つめることになると思います。広島平和記念碑を見るときには、原爆の惨さ、平和の美しさ、もう二度と過ちは繰り返さないという堅い誓いが、私たちの心に強く宿っていくと思います。原爆への怒り、そして平和への願いを込めて広島の大地を踏み締めてきたいと思います。

T29：修学旅行までの残された２週間、人間として何が大切であるか、そのことをしっかりと学びながら、この２週間を大切にしていきたい。そして、みんなにとって修学旅行がいつまでも

みんなの胸に生き続けていく、みんなを励まし続けていく、人間らしい生き方、人間を尊敬する生き方をみんなの中にしっかりと育てていく。そんな旅行にしていきたい。片岡徳雄先生の話、覚えていますか。いつもその場面が、仲間と学び合った場面が、仲間と頑張った場面が、仲間といろいろな思いをかみしめた場面が、懐かしくて、嬉しくて、楽しくて、もっと頑張らないかんという気持ちにしてくれる。そんな学習、そんなさまざまな取り組み、そんな旅行・・・・・。みんなが修学旅行に行くということは、とても深い意味があるんです。ただみんなで楽しく旅行するだけではない。本当の楽しさを共有する。さまざまなことを学び合う喜びをみんなで味わう。いろいろなことを知り、いろんなことを頑張る。そこに本当の楽しさが成立すると思うんです。「ヒロシマの歌」を学習するということは、生命を学習することです。生命なんです。死んでいった、惨い状況に死んでいった人たちの思いを心の底から感じていく。原爆資料館の中にあってもそうです。ただ何となく資料館の中に入るのではない。その奥に流れるものをしっかりととらえることができる人間になる。それが生きることの意味だと思うんです。２週間後にせまった修学旅行が、いつまでもみんなにとって懐かしい。３０歳になっても、４０歳になっても、５０歳になっても、いつまでも懐かしく思う。人として大切なものを学んだ修学旅行であった。そんな旅行にするために残された一日一日をよりすばらしいものにしていきましょう。

1989年度瀬戸中学校２年Ａ組修学旅行　～アフリカンサファリ～